

全国自治体 観光プランの今

第16回

玉藻の高松城——香川県高松市



横浜の夜景——神奈川県

しま嶋 隆文

松蔭大学観光文化学部教授
観光文化研究センター長

また、訪れたくなる神奈川の実現

神奈川県

神奈川県は、観光資源の多さや首都圏という立地において、高い優位性を持つことは間違いない。平成22年3月に策定した「神奈川県観光振興計画」の冒頭にも、こう記されている。

「神奈川には、近代日本の幕開けとなつた横浜、歴史と文化の香りあふれる鎌倉や城下町・小田原、日本を代表する温泉地・箱根・湯河原、そして丹沢・大山の緑豊かな山並みと三浦半島から湘南海岸、真鶴半島に至る美しい海岸線など豊かな自然があります。神奈川はまさに観光資源の宝庫と言えるでしょう」。

昨今、わが国の国内観光市場は停滞傾向にあるにもかかわらず、神奈川県を訪れる観光客数は8年連続で増加傾向にある（平成20年調査）。平成20年度の観光客数は1億7118万人にも上る。しかし神奈川県は、なかなか貪欲である。観光は、経済波及効果が大きく、住んで

いる人が土地への愛着を深めることに着眼し、観光を県の将来を担う主要産業の一つと位置付け、観光で活力を高めるとしているのである。

その具体的な展開が、今次の「神奈川県観光振興計

画」の策定である。平成21年秋には「神奈川県観光条例」（平成22年施行）も成立させている。県議会の支持を明確に取り付けることで、観光振興施策をゆるがせに

しないという強い思いが分かるとうものである。

1 観光振興計画の概要

神奈川県観光振興計画は、平成22年度からの3カ年計画の短期集中的なプランである。将来像としては10年後（平成31年度）を設定し、「また、訪れたくなる神奈川の実現」「観光で元気になる神奈川の実現」「外国人をひきつけるエキゾチック神奈川の実現」の3つを掲げた。入込観光客数等の達成目標は表のよう

	2010年(度)	2019年(度)
入込観光客数	1億7,200万人	1億8,100万人
平均宿泊数(一回当り)	1.4泊	1.8泊
観光消費額(全県総額)	6,400億円	7,400億円
外国人訪問客数	157万人	550万人

に設けている。外国人客数などは3倍増と強気の目標設定であり、まさに県の意気込みを示すものといえよう。

2 観光振興計画の5つの施策

神奈川観光振興計画の内容を見てみる。計画は5つの施策体系を持つている。

(1) 魅力ある観光地の形成

第1の体系の指向性は、観光での新たな魅力づくりや景観形成の推進に取り組むというものだ。農山村での工業観光、富士山を生かした観光などに着眼する。古都鎌倉の世界遺産登録の取り組みも掲げている。県内各地でオンラインワーケーションの観光地を作ろうとするものもある。

(2) 神奈川の魅力を伝える広報宣伝の充実

第2は、神奈川の観光イメージづくりと宣伝活動の展開を重視するものだ。例えば、数々の百選シリーズ（神奈川の名産、景勝など）やフィルムコミッショングなどのツールを活用して取り組んでいくとする。「かながわ観光親善大使」はすでにスタートしており、船越英一郎、キマグレン、高島礼子など神奈川出身の著名人たちが華

やかに起用されている。

(3) 観光振興による地域経済の活力の向上

第3は、観光による新事業の創出や、地域產品の振興、地産地消の促進を図るものである。地域を軸に、創業や資金調達支援、かながわ產品の販路拡大といった産業振興面での施策展開にも力を入れる。コンベンションと連動した誘客や地域主導の観光振興を促す顕彰制度の導入も行うものである。

(4) 観光旅行者を迎える体制の整備

第4は、観光人材の育成やホスピタリティの向上を図るという方向性だ。観光業界へのインターナンシップの実施やユニバーサルツーリズムの環境の整備、案内体制の充実などに配慮しようとするものである。

(5) 外国人観光客の来訪の促進

第5は、外国人の受け入れ体制の整備を図るものだ。

外国人の誘客は、神奈川県が最も力を入れる施策の一つである。アジアや欧米など市場特性に応じた観光プロモーションの展開も設定する。案内所の設置や善意通訳ガイドの支援等を行う一方、友好関係にある中国遼寧省や韓国京畿道との交流などを進めようとする。

3 3つの重点プロジェクト

神奈川県の観光振興計画は、この5つの施策を柱とする。この柱に沿って、特に喫緊に取り組むべき事業を3つの重点プロジェクトとして定めた。

(1) オンリーワンの観光地づくりプロジェクト

1つめのプロジェクトは、地域の特徴ある観光資源を開発するものだ。例えば、まちあるき観光（湘南や丹沢

大山の周遊）や産業観光（京浜臨海部）等の地域密着型のニューツーリズムを促進する。また、観光関連業者等と連携した観光まちづくり活動や、複数の市町村の広域連携による滞在型観光地づくりにも取り組む。本年度に、県西地域を中心とした「箱根・湯河原・熱海・あしがら観光圏」が国から認定されたこともあり、地域性を生かした広域誘客事業の盛り上げが期待されるところである。

(2) 観光で元気はつらつプロジェクト

2つめは、観光関連産業の経営基盤の向上やNPOなどの県民活動の活発化、地産地消の取り組み促進を目的とするものだ。本県への回遊（リピーター）と滞在（2泊3日以上）の促進を図り、観光プロモーションの強化

に努めようとする。特に、産学公の連携体制によるオール神奈川での観光振興を目指す。一例をあげると、県内の大学等と「かながわ観光大学」なる連携事業に着手している。県内で観光関連学部学科を持つ松蔭大学、横浜商科大学、文教大学と共同し、「移動観光大学」などを県内各地で開講して、人材育成を図ろうとしているのである。

(3) 外国人旅行者200万人来訪プロジェクト

3つめは、本年10月末の羽田空港の再拡張・国際化（4本目の滑走路の供用開始）を背景に、特に東アジアを中心とした外国人旅行者の誘致を図るものだ。具体的には、羽田に「観光情報センター」を新設し、また近隣都県と連携した観光プロモーションや海外エージェントの招聘に取り組む。他方で、海外からの青少年の教育旅行誘致や、インターネットによる観光情報の発信強化、観光ボランティアガイドの活動支援等で、受け入れ体制を充実させるとするものだ。

4 期待される個別の地域計画

観光振興は、地域の特性に大きく依拠するものである。

神奈川県は大都市の横浜、川崎を抱える一方、農山村地域も広い。県西、県央には山々が控え、三浦、湘南には海が広がる。それだけに県政全体の観光振興方針を持ちながらも、市町村などの各地域がその特性を活かした観光振興を図ることが重視される。

神奈川県の観光振興計画は、こうした観点から、県内の5つの地域政策圏に対し、それぞれの観光の地域計画の将来像を提案している。この政策圏とは、神奈川県の「神奈川力構想・基本構想」（県の基本計画）に示されたもので、①川崎・横浜地域圏、②三浦半島地域圏（横須賀、鎌倉など）、③県央地域圏（相模原、厚木、大和など）、④湘南地域圏（藤沢、茅ヶ崎、秦野など）、⑤県西地域圏（小田原、箱根など）の5つである。

例えば③の県央地域圏での地域計画の指向性を見てみる。ここには市街地がほどよく配置されているが、宮ヶ瀬など5つのダム湖もあり、山裾には里地や里山がある。温泉地もあれば、旧甲州街道や大山街道もある。多様なアウトドア体験の拠点や、あつぎ鮎まつりといった観光イベント等の観光資源もある。しかし、課題は少なくない。日帰り客が中心で、消費単価も低いのである。

そのため県の観光振興計画では、ここ県央での将来像を次のように提示している。

① 東丹沢から奥相模エリアの豊かな自然を生かした観

光の展開
② 地域に残る古道や歴史的な建物、文化を生かした観

光の展開

③ 市街地のにぎわいや産業施設など、都市の魅力を生かした観光の展開

その上でさらに具体的な施策を示すのだ。例えば、県央地域の魅力を伝える観光PRの展開として、大学等と連携した観光モデルコースの作成や、「旅たび相模／丹沢・相模観光ナビ」といったポータルサイトによる広域観光情報の発信を行おうとするのだ。

神奈川県は、各市町村や地域の住民が元気である。それだけに今回の県の観光振興計画が、広域的視点からの観光振興の方向性を示すとともに、市町村の活性化と相互の連携を深める指針となっていることは評価できよう。ただそう考えた時に、この計画書が県民目線からはやや親しみにくいこと、換言すればもつとビジュアルで読みやすい工夫があつてもよかつたと思うものである。

あつたか都市・ゆつたり都市が目標像

香川県高松市

香川県高松市は人口42万人。瀬戸内に開かれ、四国の玄関口として政治経済の重要な拠点となつてゐる香川県の県都である。源平合戦の屋島で古くから名高い。最近では、ロケ地となつた映画「UDON」「世界の中心で、愛をさけぶ」のヒットや、高松港のウォーターフロントに整備されたサンポート高松の文化・ビジネスの様々な取り組みで話題を呼んでいる。

高松市は、平成20年に「高松市観光振興計画」を策定した。計画期間は平成20年度から24年度までの5カ年である。計画策定のきっかけは平成の大合併における香川町や国分寺町など近隣6自治体との合併であり、また平成19年の観光立国推進基本計画の策定であつた。いや、この言い方は必ずしも正確ではない。すでに市は、平成10年に長期的視点に立つた高松市観光振興計画を策定しており、今回の策定はこの計画の改定版である。高松市

は早くから観光振興に取り組み、観光を重要施策とする姿勢は一貫して積極的なのだ。

1 前計画の改定姿勢での特徴

高松市は、十数年も前から観光振興に大いに力を入れてきており、それだけに平成20年改訂の観光振興計画もユニークな特徴を持つものである。

特徴の一つは、前計画を基本的にそのまま踏襲していることである。前計画の策定から10年以上の歳月がたっているにもかかわらず、高松市は、観光振興における前計画の枠組みは有効だとこれを継承した。魅力ある観光都市としての誇りと、観光振興プランを着実にやり遂げてきているという自信が垣間見える。

もう一つは、前計画の分析をしっかりと行っていることだ。前計画の中から38施策を取り上げ、その一つひとつ到達内容を分析しているのである。例えば、「隠れた観光資源の掘り起こしと活用」といった項目が、平成17年のNHK大河ドラマ「義経」に絡めた屋島・牟礼の史跡ガイドマップ作製や、平成18年の「高松まちかど漫遊帖」と題したまち歩きガイドなどによつて実施されたこと等が示される。これら分析に計画書は、何と10ページ近いスペースを割いている。

2 高松観光振興計画の概要

では平成20年にリニューアルされた高松市観光振興計画の、ポイントを見てみよう。まず計画の目標像である。市の総合計画（平成20年策定）で掲げる都市像「文化の風かおり 光かがやく 瀬戸の都・高松」を踏まえるもので、次の3つを都市イメージとして定められた。

- ① あつたか都市・高松
- ② ゆつたり都市・高松
- ③ 世界に発信する都市・高松

①「あつたか都市」は、おもてなしの心を持つたやしさと触れ合えるとの意味であり、②「ゆつたり都市」は、瀬戸内海を始めとする美しい豊かな自然と文化を育み、うるおいとやすらぎを味わえるとの思いを込める。

③「世界の発信する都市」は、アート・ハブ・シティ（芸術周遊拠点都市）を目指し、文化の風と光を、とのコンセプトを持つというものだ。この3つの都市像の下に、各施策が体系化される。

その多くの施策の中から、今次の計画策定にあたり、特に重点施策として優先順位の高いもの13項目が掲げられた。計画終了期間の平成24年度までに、達成すべき目標値も明確に定めている。総花的な展開でなく、メリハリをつけた取り組み姿勢に、計画実施への戦略性が伝わってくる。

3 重点施策の内容と目標値

ではその具体例をいくつか挙げてみよう。

第1に、「源平屋島地域の観光振興」が挙げられてくる。庵治・牟礼・屋島の観光資源を生かした、広域的な観光地づくりを目指すとする。その指標として、屋島ド

ライブウェイ利用者数を現況値68万人（平成19年度）から80万人（平成24年度）にまで伸ばそうとしている。

また、「まち歩き型観光の充実」としてかねてから評判の良かつた「高松まちかど漫遊帖」などの体験型イベントを積極的に展開しようとする。参加者数923人（平成19年度）を2100人（平成24年度）まで拡大するものだ。

特筆すべき取り組みに、「アート・ハブ・シティ高松の形成」がある。ベネッセコーポレーションが安藤忠雄らの協力を得て作りあげ、今や世界的な芸術の島となつた直島や、20世紀を代表する彫刻家ノグチ・イサム庭園美術館（牟礼）。こうした文化資源を巡る拠点としての高松のロケーションに着眼し、芸術周遊拠点として内外からの誘客を図ろうとするものである。指標としては、高松市インフォメーションプラザの外国人利用者数を2700人（平成19年度）から6000人（平成24年度）まで増やす。同様な施策として「洋上観光の推進」がある。サンポート高松を起点とするサンセットクルーズや、女木・男木、小豆島、直島などの島々を結ぶ洋上観光を促進する。

また、「高松観光プロモーション事業」も特筆できる。

民間の経済活動を観光振興の原動力とするもので、企業、各種団体、市民事業者等から市のイメージアップや集客力を高める事業を公募・認定し、その活動を支援する。全国でも珍しい取り組みであるが、平成24年度目標値は50件としている（指標は事業の累積認定数である）。

きめ細かい施策もある。「自転車利用による観光振興の推進」である。平坦な土地が多い特性に目をつけ、市内リサイクルだけでなく、各地域の観光スポットにおいても観光レンタサイクルを実施しようとする施策である。新たな取り組みであり、平成24年度には利用件数1万件を目指している。

四国・高松ならではのプロジェクトもある。「お遍路支援組織との連携」等の取り組みがこれである。高松では、NPO等がお遍路さんの道案内のためのマップやおもてなしステーション（休憩所）の設置、実のなる木（接待木）の植樹を行っているが、この活動への支援を進めようとするものだ。おもてなしステーションの設置件数339件（平成19年度）を500件（平成24年度）まで増加させようというのがこの目標となっている。

そして、忘れてはならない取り組みに「塩江地域の観光振興」として交流人口の拡大で定住人口の拡大を、というプロジェクトがある。塩江は、平成の合併で高松市に編入された市の一一番南部の地域だが、山間部が広大なため観客はなかなか困難である。そこで、団塊世代向けの田舎暮らしを体験させようと/orのえ等の取り組みを支援しようと/orのえ等の取り組みを支援しようとするものである。市として全体的な観光振興を図るという点からも、重視される施策となっている。

4 計画策定から2年たつての課題

高松市観光振興計画は、策定（改訂）されてちょうど2年たつ。課題も少なくない。市の観光振興課の中西省吾課長補佐はこう言う。

「これから課題は、PR・情報発信がなかなか難しいことです。観光客の入込数の伸びは今一つで、計画通りに進んでいくわけではありません。しかし、まち歩きイベントの参加数などは地域ボランティアの広がりもあって、増加しています。また今年は瀬戸内国際芸術祭（副題「アートと海を巡る100日間の冒険」）が7月19

日から10月末まで開催されます。サンポート高松と瀬戸内の7つの島々を舞台に展開する現代アートの祭典で、全国からの集客を期待しています。

高松で生まれ育った私にとって、この瀬戸内の海は子どもの頃から、どんな時でも、私を受け入れてくれる母のようない存在です。地中海にも勝る多島美と言われることの瀬戸内の魅力は私たち共有の宝物であり、日々の生活の中で大切にしながらも誘客の観光資源として大いに生かしていきます」。

ふるさと高松を誇りにする思いが伝わってくるというのだ。観光振興計画を作るにあたり、参考にしたい格言があるとしてプランの中でもこう表現している。

「論語の一節の「近き者説び、遠き者来る」^{よろこ}で、近くにいる者が喜びを懐けば、その噂を聞いて、遠くの者が自然にやつてくる、ということである」。

つまり地域自らが満足できるまちづくりを進め、地域の光を自ら磨きあげていけば、人々の交流につながる。

こうした格言を観光振興計画の冒頭の掲げるところに、やはり高松市の観光振興施策に対する積極性が見えるというものである。

観光の語源

「観光」の語源は、中国の『易經』の一節「觀國之光」、すなわち「国の光を觀る」という表現に由来するというのが一般である。觀光という言葉がわが国で使用されたのは幕末であり、わが国初の洋式訓練用軍艦が觀光丸と命名されたり、佐野藩の藩校が觀光館と命名されたりしている。このことからみても觀光が「国の光を觀る」の意味で使われていたものと考えられる。明治8(1875)年刊行の『米欧回覧実記』の扉には岩倉具視により「觀光」が揮毫されている。ここでは觀光を「外国を視察する」という意味で使っている。明治38(1905)年発行の辞書『作文新辭林』に、觀光は「外國の光華を觀察する事」として収録されている。また「觀光」はその後、主に外国人觀光客誘致という意味で使われ、国内觀光には、遊山、遊覽、漫遊、行楽などの用語が使われていたともされる。觀光が今日のように楽しみのための旅行や見物のための旅行を指すようになったのは1960年代以降のことである。しかし昨今「觀光」が、とかく物見遊山的な行動に表現されがちなことから、その言葉の狭義性を問題視する指摘もある。

(出典：松蔭大学編「観光キーワード事典」)

